



多賀台 奈良 孝次郎

1. 〈じゃがいも栽培のこと〉

天保の頃(1830年代)、市川の村の生活を伝える資料に「市川日記(県重宝)」がある。それによると食料不足の中で生活を支えた作物がじゃがいもだった、と書かれている。

じゃがいもは南アメリカ原産、日本へは16世紀の末にジャガタラ島から伝えられた。(じゃがいもの名称のおこり) じゃがいもの食料としての良さは、たくさんの澱粉をふくんでおり、健康維持に役に立つこと。しかも気候や風土を選ばず大量にいもをつけることから、不作にも強い救荒作物(凶作に備えるために栽培する作物)であり、価格も安いことから「貧者のパン」ともいわれ、ヨーロッパでも広く栽培された。

2. 〈じゃがいもの呼び名〉

じゃがいもが、不作のころの人々の生活をいかに支えたか、その名前の多さからも読み取ることができる。「五升いも」→ 一株掘るといもが五升(9升)も穫れる。「車いも」→ 収穫が多く、手車に積んで運ばなければならない程。「なりいも」→ 一株を掘るとおどろくほどいもがついてくる。「花いも」→ 昔、澱粉のことを「はな」というていた。「定助いも」→ 栽培の方法を伝えた人の名前からか。

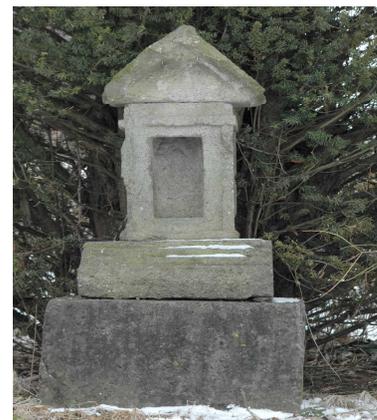
まだほかにもあるが、たくさんの呼び名があるということは、人々の暮らしや地域と密接につながっていることを示している。(以下、次号)

【石碑をたずねて③】

陸奥市川 鈴木 亮

(写真:木村隆一)

1. 名称 「水ありて農榮ゆ」
〈藤田家の新田開発〉
2. 場所 五戸町・上市川の
「北市川橋」付近
3. 内容 〈又右衛門堰〉と
頭首工の完成を後世に
残すため昭和55年6月
2日・市川土地改良区が
建立したもの。



弘化5年(1848)
建立の記念碑

4. 由来 五戸御給人、藤田武兵衛(明和2年～弘化4年)と藤田又右衛門(文化元年～明治6年)親子が二代にわたって五戸町上市川と八戸市市川町に跨がる広大な原野を天保7年(1836)から安政3年(1856)まで21年間を費やして開拓。当時、五戸の豪商一族で奥州の長者と言われた藤田家も、この難工事のために私財を投じてそれを使い果たし、傾いてしまった。しかし、その後住民達の協力と努力により、ついに完了されたとのことである。その証とも思われるお堂型の古い石碑(写真右)が、上市川にある頭首工(川などから農業用水を用水路へ引き入れるための施設)・捲揚水門近くにあり、この石碑の側面に「奉建立」という文字と、世話人として尻引村、「弥兵衛(川村健子氏)」「才次郎(谷地秀典氏)」「才助(風穴貞行氏)」と、上市川村・六助、惣四郎の名前が刻まれている。

当初3カ年で完了予定が、隆起の多い山裾沿に用水堰を開削したために、その7倍の歳月を要し想像を絶する難工事であったと、現在尻引の藤田家に代々言い伝えられているとのことである。

※先代の藤田行雄氏(1921～2006)より聞き及んでいたことを文字にしました。(鈴木 亮)

〈お知らせ〉 県重宝「市川日記 天保三辰ヨリ七ケ年凶作日記」を、発行者の向谷地芳久氏が市川公民館に寄贈して下さいました。ありがとうございました。

